

総括研究報告書

1. 研究開発課題名：発達障害者の特性をふまえた精神科ショートケア・プログラムの開発と臨床応用（修学・就労支援）に関する研究
2. 研究開発代表者：加藤 進昌（昭和大学発達障害医療研究所 所長）
3. 研究開発の成果

本研究は、昭和大学附属烏山病院において平成 20 年から開始した成人発達障害者に特化したデイケアの試みの中で、抽出されてきた問題点について解決策を探るものである。すなわち、1) デイケアスタッフが試行錯誤を繰り返して作成した全 20 回で構成されるショートケア・プログラムを、患者層や環境の異なる全国のデイケア施設でも実施し、プログラムの標準化を行う「発達障害者のリハビリテーション・プロジェクト」と、2) 発達障害者が成人になって最初の関門である大学生活を円滑に、そして就労のための準備を支援して、つまづきをいわば予防する「発達障害学生の社会参加プロジェクト」である。

リハビリテーション・プロジェクトに関しては、昭和大学発達障害医療研究所（代表者・加藤進昌）が中核となり、全国のデイケア施設に呼びかけて関心のある施設関係者を集めた研究会（7 月 8、9 日）を組織して、統一した標準プログラムを実施した。平成 27 年 9 月 26 日に第 3 回研究会を昭和大学上條講堂で行い、約 150 名の参加を得て、ショートケア・プログラムの概要説明と実施中の施設からの予備的報告を行った。標準プログラムはマニュアル（スタッフ用）とワークブック（当事者用）から構成され、10 名程度の当事者グループに 2 名のスタッフがつくという形式で行った。全国の施設 8 か所でこれまでに約 100 名の当事者が全 20 回を終了した。効果に関しては現在集計中で、来たる平成 28 年 11 月 19 日に予定されている第 4 回成人発達障害支援研究会で発表される予定である。

大学生の間での発達障害の実情に関して、東京大学の発達障害支援部門であるコミュニケーションサポートルーム（CSR; 分担者・渡邊慶一郎）は実態調査を行った。CSR 利用者の 15.5%が修学支援を、14.4%が就労支援を受けていた。被支援者の認知機能の特性を WAIS-III で検討してその特徴を抽出した。発達障害学生の特徴としては、学生自身のニーズの低さが浮かび上がった。彼らの自己像の希薄さを物語るものであり、今後の支援方策の鍵になると思われた。同じく研究分担者である早稲田大学保健センター（井上真郷）では、心理士 1 名を補助員に採用し、心理アセスメントに充てた。学内関係部署へ呼びかけを行い、事例の紹介に努めたが、まだ学内の認識は高いとはいえず、ショートケア・プログラムへの紹介は 6 例にとどまった。

学生の社会参加プロジェクトは（公財）神経研究所晴和病院（分担者・上瀬大樹）が中心となって大学生対象のショートケア・プログラムを試験的に平成 27 年 7 月から開始した。平成 27 年 8 月 18 日に発達障害学生へのアプローチを模索している大学関係者を集めて検討会を開催した。プログラムは、平均 8 名（最大 11 名）の参加を得て全 12 回 1 クールで実施中である。プログラムの進展に伴ってグループの凝集性が高まることが観察された。平成 28 年 6 月で一旦終了し、プログラムの見直しと大学の年間スケジュールとの整合を図る予定である。

マイルストーンとしては、数値目標はおおむね達成できたと考えている。今後については、標準化への参加施設は 12 か所に増える見込みである。標準プログラムも年内には出版予定であり、問い合わせも増えることが期待される。リワークや大学生など当事者の属性によっては付加的なプログラムも開発する必要があると思われ、次年度以降の課題と考えている。また就労支援施設との連携も今後図っていく必要がある。